

祈りの3つのタイプ

□ 「祈り」に関する学び全体のテーマ

1. 祈りの原則
2. 祈りの3つのタイプ
3. 旧約聖書の中の祈り
4. 新約聖書の中の祈り
5. 祈りの条件
6. 祈りの構成と内容
7. 祈りのルール
8. 祈りの諸問題

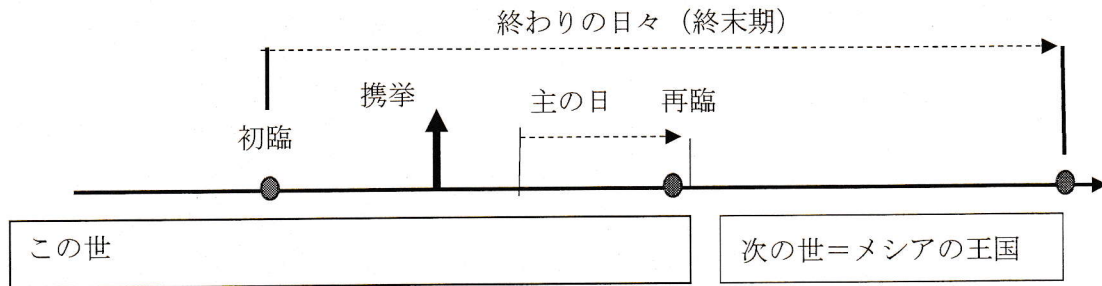
□ 「祈りの3つのタイプ」のアウトライン

1. 個人的な祈り
 - (1) マタイ 6 : 5~6 人に見せる祈り 対 正しい祈り
 - (2) 祈りの基盤
 - (3) 神のことばとの調和
 - (4) 「願う」と「ゆだねる」とのバランスについて教える聖書箇所
 - (5) 怒りや不満を含む祈りは受け入れられるのか？
 - (6) 個人的な祈りの手本
2. 集会での祈り
 - (1) 使徒 1 : 14
 - (2) 使徒 4 : 23~31
 - (3) 使徒 12 : 5、12~17
 - (4) 使徒 16 : 25
 - (5) 使徒 20 : 36
 - (6) 使徒 21 : 5
 - (7) 使徒 27 : 35
 - (8) 集会での祈りで、避けるべき 10 のこと
3. 終末期における祈り
 - (1) 現代の信者が祈るべきこと＝携挙についての祈り
 - (2) 大患難期前半期において信者が祈るべきこと＝イスラエル民族の避難について
 - (3) 大患難期後半期において信者が祈るべきこと＝メシアの再臨について
 - (4) メシアの王国の時代における祈り

注：終末期は、メシアの初臨から始まる。メシアの王国までを含む。

祈りの3つのタイプ

第三 終末期における祈り



□この世と終末期について

1. 聖書は、人類の時代を、大きく三つに分ける (マタイ 12 : 32、Ⅱペテロ 3 : 3~13)
 - (1) 「古い昔」 (Ⅱペテロ 3 : 5)
 - (2) 「この世」 (マタイ 12 : 32)、「今の天と地」 (Ⅱペテロ 3 : 7)
 - (3) 「次に来る世」 (マタイ 12 : 32)、「後の世」 (マルコ 10 : 30)、「次の世」 (ルカ 20 : 35)「正義の住む新しい天と新しい地」 (Ⅱペテロ 3 : 13、イザヤ 65 : 17)、
2. 「古い昔」は、アダムからノアまで。この時代はいったん、洪水で滅んだ (Ⅱペテロ 3 : 6)。洪水を経て残ったノアの家族から、今の世の人類が広がった。
3. 「この世」の歴史は戦いに明け暮れているが、「世が改まって」 (マタイ 19 : 28)、「次の世」は神の国、メシアの王国である。この地上に、神による平和と正義が確立される。
4. 「終わりの日 (日々)」 (イザ 2 : 2、ミカ 4 : 1)、「終わりの時 (日々)」 (ヘブル 1 : 2)
 - (1) メシア到来後の時代を指し、次の世であるメシアの王国も含む。
 - (2) 神学的には、これを「終末期」と呼ぶ。
5. 終末期について
 - (1) いつから終末期になるかと言うと、メシアの到来。紀元 26 年にメシアの公生涯が始まり、紀元 30 年に十字架の死、復活、昇天が起きた。メシアは、すでに来た。したがって、現代は「この世」の「終わりの日々」の中にある (ヘブル 1 : 2)
 - (2) 「この世」の最後の 7 年間は、大患難期。旧約聖書では「主の大いなる恐るべき日」 (マラキ 4 : 5)、「主の日」 (ヨエル 1 : 15、ゼカリヤ 14 : 1)。新約聖書でも「主の日」 (Ⅱペテロ 3 : 10)。「不敬虔な者どものさばきと滅びの日」 (Ⅱペテロ 3 : 7)
 - (3) 目に見えない普遍的な「教会」に属する信者たちは、大患難期の前に、地上から携挙されて、天に移される。
 - ① このとき、教会の信者たちで、すでに死んで天のパラダイスにいた者たちは、復活していったん地上に立ち、すぐに携挙されて、天に戻る。
 - ② このとき、地上で生きている信者たちは、死を経ないで、一瞬のうちに復活と同じ体に変換される。そしてすぐに、復活した信者たちといっしょに、天

に引き上げられる。

③ これを、「携挙」と呼ぶ。携挙される信者は、新約時代の教会の信者たちだけ

④ 旧約時代の信者たちは、そのときはまだ復活の体は与えられず、天で待つ。

彼らの復活は、大患難期が終わって、次の世である神の国が始まる直前

(4) 現代の私たちは、「この世」で、すでに終末期の中に生きていて、携挙のときを待ち望んでいる者たちである。私たちは、大患難期を地上で経験することはない。

6. 大患難期について

(1) 大患難期7年間は、前半の3年半と後半の3年半とに分けられる。

(2) 前半の3年半では、エルサレムに2人のユダヤ人預言者が立って、イエスをメシアであると、イスラエルの人々に宣教する。一方、全世界のユダヤ人の中からイエスをメシアと信じる信者144,000人が起こされ、全世界で宣教活動をする。

① これにより多くの異邦人がイエスを救い主として信じ、信者となる。彼らは、私たちのような「教会の信者たち」とは区別され、「大患難期の信者たち」と呼ばれる。

② 前半3年半においては、宗教界はすべての宗教・宗派が統一され、その総本部がバビロンに置かれる。世界統一宗教は、イエスを信じる異邦人信者たちを迫害弾圧し、多くの殉教者がでる。

(3) 前半から後半に移る時期を中間期と呼ぶ。国際社会が大きく変わる。

① 「反キリスト」と呼ばれる人物が、主要国10か国のうちの3か国を打ち破って世界を統一支配する。

● 戦死→蘇生→勝利（二人の証人に対しても）→7か国の服従

② 彼は政治・経済の実権を握るだけでなく、バビロンの世界統一宗教も倒して、自らを神であると宣言する。

③ 彼は世界統一政府の首都をバビロンに置く。

④ 彼はエルサレムに来て、神殿の中に入り、神殿に自分の像を設置する。イエスは、このことが起きたら、イスラエルにいるユダヤ人たちは山へ逃げるように命じている（マタイ24:16）。

(4) 後半の3年半は、反キリストによるユダヤ人弾圧。「終わり（の日）が来る」（マタイ24:14、原文に「の日」なし）。

① ユダヤ人で生き残るのは、3分の1。その大半が東の山間地の町ペトラ（旧約預言ではボツラ）へ逃げた人々。

② 生き残ったユダヤ人の全員がイエスをメシアであると受け入れ、イスラエル民族の民族的救いが起きる。彼らがイエスに「帰ってきてください」と祈ると、イエスは天から地上に帰る。これが、メシアの再臨。

③ 再臨のとき、反キリストはメシアによって倒される。

□終末期の祈り

「祈りの3つのタイプ」と題して学んでいるが、祈り自体のタイプは、2つである。
個人的な祈りと集会での祈り。

3つめのタイプは、祈りそのもののタイプではなく、終末期の各時期に特有の祈りがあるという意味での区分け。そのような時期ごとの特有の祈りには、次のように4つある。

1. 現代の信者が祈るべきこと＝携挙についての祈り
 2. 大患難期前半期において信者が祈るべきこと＝イスラエル民族の避難について
 3. 大患難期後半期において信者が祈るべきこと＝メシアの再臨について
 4. メシアの王国の時代における祈り
1. 現代の信者が祈るべきこと＝携挙についての祈り
 - (1) ルカ 21 : 36
 - (2) 祈らなければ、携挙から外れるのか？
 - ① そうではない。教会の信者は、全員が、携挙にあずかる。
 - ② 携挙を祈ることは、救われるべき人の数が満ちることを祈ることにつながる。宣教の思いが与えられ、この恵みのわざに参加させていたくことになる。
 - ③ 携挙を祈る信仰生活の中で、信者として「目をさましていなさい」という主の命令に従っていくことができる。主に従うところに、信者の喜びもまた満ちあふれる。
 2. 大患難期前半期において信者が祈るべきこと＝イスラエル民族の避難について
 - (1) マタイ 24 : 20、マルコ 13 : 18
 3. 大患難期後半期において信者が祈るべきこと＝メシアの再臨について
 - (1) マルコ 13 : 33
 4. メシアの王国の時代における祈り
 - (1) メシアが祈りの対象となる（詩 72 : 15）
 - (2) エルサレムの神殿は、万国の民のための祈りの家となる（イザ 56 : 7、マタ 21 : 13、マルコ 11 : 17、ルカ 19 : 46）
 - (3) 異邦人たちがエルサレムに定期的に来て、祈る（ゼカ 8 : 21～22）

□お知らせ

今年は、中川先生の一斉セミナーは、東京会場だけでの開催となり、福岡ではセミナーがありません。そこで、5月16日（土）の福岡集会の時間帯を1日とし、この日1回で完結する特別テーマを扱います。

日 時：2020年5月16日（土） 開場午前9時半、午前10時開始、午後4時終了

テーマ：大患難期の前に起きること

定 員：30名

会 費：500円（会議室利用料などに充当します）